



Title	Interface humanities 03
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/12940">https://hdl.handle.net/11094/12940</a>
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイスの人文科学 / Interface Humanities
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Interface Humanities

03

役割を選び取る・役割から抜け出す

## Contents

特集 役割を選び取る・役割から抜け出す

- 3 対談 近代日本マンガの顔・身体ことば  
吉村和真×金水 敏
- 社会と役割  
14 役割とエンデの社会  
中川 敏
- 臨床・対話と役割  
16 告白する仮面  
中岡成文
- 性と役割  
18 性別という役割  
荻野美穂
- 演劇と役割  
20 ドラマとしての能における「役割」  
—「地謡」についての誤解をめぐって—  
天野文雄
- ブックガイド  
22 「役割」を読み解くための12冊  
ih.Topics
- 23 「インターフェイスの人文学」イベント紹介(2002～2003)
- 24 「インターフェイスの人文学」2002・2003年度報告書のご紹介
- 26 「インターフェイスの人文学」関連業績一覧
- Interface  
30 全国高等学校世界史教員研修会  
山内晋次
- 現代を測る  
32 市民と文化財のはざまで  
伊藤聖浩
- フィールドのざわめき  
34 サイデンステッカー氏との座談会  
『源氏物語』翻訳者としての日本文学観  
伊井春樹
- フィールドのざわめき  
36 葉を求めて —「右の耳に水」—  
横田睦子
- 人文学のフロンティア  
38 「記憶の文化」を考える  
—オーストリアにおける「集合的記憶」を事例に—  
水野博子
- 40 編集後記

- Feature: Choose your role! / Break out of your role!
- 3 Face, Body and Language in *Manga*  
Kazuma YOSHIMURA / Satoshi KINSUI
- 14 How to Behave in Ende  
Satoshi NAKAGAWA
- 16 Confessing Masks  
Narifumi NAKAOKA
- 18 Trans/gendering the Body  
Miho OGINO
- 20 "Role" in *Nob* as a Drama: Reconsideration of *Jiutai*  
Fumio AMANO
- 22 Book Guide: twelve fundamental books for understanding "Role"
- 23 Events in Interface Humanities 2002-2003
- 24 Interface Humanities: Research Activities 2002\*2003
- 26 A List of Members' Achievements in 2002-2003
- 30 A Report of the First Seminar for High School Teachers of World History  
Shinji YAMAUCHI
- 32 Dilemma between the Citizens and Cultural Assets  
Masahiro ITO
- 34 Interview to Seidenstecker:  
Japanese Literature viewed by a Translator of *The Tale of Genji*  
Haruki II
- 36 Searching for *Shiori*: Water into Right Ear  
Mutsuko YOKOTA
- 38 On Culture of Memory: A Case of "Collective Memory" in Austria  
Hiroko MIZUNO
- 40 Editorial Note



Interface Humanities

「インターフェイスの人文学」ニューズレター03の特集として、「役割」という概念をキーワードに選びました。「役割」が一つのインターフェイスであり、人文学的知を横断的に見渡す際の、あるいは様々な知を臨床的に見直す際の一つの手がかりとなると考えたからです。役割とは、自己と他者個と社会の接觸面に成立するFunction（機能・函数）です。私たち一人一人は、個体として生活していますが、社会の中で他者と接するとき、必ず何らかの役割を担うことになります。逆に、私たちも他者を個として見るというよりは、まず役割として見ていくべきでしょう。その役割とは、例え次のようなものです。

・巨視的な人のカテゴリー・国籍・人種（日本人、外国人、西洋人、東洋人等々）、性別（男・女）  
・教師、友人、先輩・後輩、恋人、妻・夫、姑・小姑、老人…  
また、役所や学校の窓口における担当員と相談者、タクシーの運転手と客、裁判における原告・被告・弁護人・裁判官といった場面限定的な役割もあります。さらに微視的には、対話における話し手・聞き手というのも役割の一つでしょ

う。また私たちは人生において主役（ヒーロー・ヒロイン）となり、自らの物語を紡いでいく一方で、他者の人生における脇役として関わっていきます。神話、昔話、小説、演劇、映画等の物語は、そのような役割の絡み合いとして人生の一面を凝縮的に描き出したものと捉えることができるでしょう。

私たちは日常の中で、他者に、その役割に応じた姿・立ち居振る舞い・行動を期待し、また自らも与えられた役割に即して言動しようとしている。その役割は大抵、单一ではなく、複数に跨っています。それ故、時には与え



## 役割を選び取る。 役割から抜け出す

特集

られた複数の役割同士の間に矛盾・対立が生じ、それに苦しみされることもあります。「個」あるいは「自己」とはそのような役割同士のきしみ、隙間にこそ顔を出すものと言べきでしょう。また、それぞれの役割には、本質的な属性以上に、人々の思いこみ（ステレオタイプ）が染みつき、それが偏見や差別を生じさせ、個を抑圧する方向にも働きます。私たちは時として、与えられた役割を脱ぎ捨て、また新たな役割を選び取ることで、そこから自由になる必要があります。そのような役割の動的な転換・組み替えが、個を生き生きと魅らせ、また社会を活性化することにつながります（時には新たな対立・紛争を巻き起こすこともあります）（時には新たな対立・紛争を巻き起こすことにもなるでしょう）。人文学的目的の一つは、こういった役割にまつわる思いこみ、固定化、平板化を暴き立て、その仕組みを知ることで、そこから人々の精神を解き放つことにあるのではないか。

本特集では、「役割」という概念を多様な観点から捉え、役割が成立する仕組み、あるいは役割を解体する手立てを知る端緒となるような、一つの対談と四つのエッセーを用意しました。対談では、日本マンガにおける役割の表現とその起源を、絵と言葉の両面から検証しています（吉村・金水）。続くエッセーでは、インドネシアの一地方における、社会的役割の機能とその調整の仕組み（中川）、臨床的立場から見た社会的・対話的役割（中岡）、現代社会における性的役割（荻野）、能における地謡の役割を通じて見た演劇としての能の役割（天野）といった問題がそれぞれ扱われています。さらにそれぞれの対談やエッセーに関連する本を12冊選び、ブックガイドとしました。これらの省察が、「インターフェイスの人文学」を読み解き、深めていくための鍵となれば幸いです。

（金水敏）

↓  
対談

マンガと役割

## 近代日本マンガの顔・身体とことば

吉村 和真 × 金水 敏

…というわけで、三時間に及ぶ  
マンガ対談がはじまつた…

ボクは遅れてきた  
手塚ファンみたいなところが  
ありますて…

私はちょうど、月刊誌から  
週刊誌への移行期に  
マンガを読み始めた訳で…

二〇〇三年一二月一五日、  
ボクはマンガについて対談するため、  
大阪大学に呼び出された…

画：金水 敏



吉村和真  
よしむら・かずま

写真：大橋哲郎

ご著書  
『ヴァーチャル日本語  
役割語の謎』の中、  
役割語に自己同一化  
できないという話が  
特におもしろかった  
んです。

それは世代が近いとか  
自分に関係が深いとかの  
問題じゃなくて、  
おそらく  
語り口から考えて  
自分がどういう立場で  
この物語を伝え、  
聞くのか。

しつけとか、物語のもつ  
単なるおもしろさ  
だけじゃなくて、  
子供に語り伝えない  
といけない、  
物語の持つ役割を、  
そのまま言葉に  
託そようと。

そうですね。

もともとは民話っていうのは  
それぞれの方言で行われるの  
であって、だから前近代には  
そういう形で引き継がれて  
きたはずなんですが、  
童話っていう形で本を読み  
聞かせるっていう形に  
されたときに、  
標準語が入ってくるって  
いうことなんです。

昔話をお母さんが子供にしゃべるときも  
ですね、自分は誰として話を聞くのか  
ということを子供に説明しなくとも、自然と  
話し方の中で役割分担させてますから、  
おじいさんが登場してもおじいさんになること  
はないですね（笑）。

それは世代が近いとか  
自分に関係が深いとかの  
問題じゃなくて、  
おそらく  
語り口から考えて  
自分がどういう立場で  
この物語を伝え、  
聞くのか。

個々の役割語の起源は、江戸時代まで  
さかのぼることもあるんですけど、標準語と  
いうものがあるということによって、標準語を  
核として役割語が配置されているという構造が、  
以前とは全然違うものだということを  
考えているんです。

それがいわば国民国家を  
内面から形成していくことに  
おそらく結びついていくんだと  
思うんですよ。

それはマスマディアで  
標準語が統制されていくっていうのと、  
学校教育でも教科書が標準語で教育されていく。  
そのときに主人公の心情を読み取りましょうって  
いうような教育をされるときには  
やはり標準語で発想されるわけなんですよね。  
だから標準語っていうものによって内面を読み取れ、  
つまり内面イコール標準語ってことが、  
植え付けられて、それ以前のことが  
まったく忘却されてしまうということですね。  
それ以前の状態を想像することができない。

金水 敏  
きんすい・さとし

近世における役割語的なもの発生と、  
近代以後というのは、  
役割語の意味合いが  
かなりちがうと思います。

## 登場人物紹介



吉村和真（よしむら・かずま）

一九七一年、福岡生まれ。熊本大学文学部卒業。立命館大学大学院博士課程中退。日本学術振興会特別研究員を経て、現在、京都精華大学表現研究機構マンガ文化研究所研究員。日本マンガ学会理事・事務局員。専門は「思想史」、「似顔絵の成立とまんが」。  
「見ているのは誰か」（ジャクリヌ・ヘルト編「マンガ研究」）、「見る、学ぶ、次元」（『露譲書房』、二〇〇一年）、共同研究「マンガによる視覚情報の視覚的記録」（『京都精華大学紀要第十六号』、二〇〇四年）など。「マンガを読む」ことはいかにして日常的経験へと移行したのか、それは人々の生き方や思想にいかなる影響を与えてきたのか、などについて研究することで、マンガ無しでは生きられない自分自身が何者であるかを俯瞰的に位置付けようと考えている。



金水敏（きんすい・さとる）

一九五六年、大阪生まれ。東京大学大学院博士課程中退。大阪女子大学講師、神戸大学文学部助教授等を経て、現在、大阪大学大学院文学研究科教授。専門は「国語学・言語学」。主な著書として「意味と文脈」（共著、岩波書店、二〇〇〇年）、「時・否定と取り立て」（岩波書店、二〇〇〇年）など。幼少時代より、漫画雑誌、SF読み物、怪獣画、ちゃんばらドラマ、お笑い番組、アニメーションなどに囲まれて育つ。最新の著書「ヴァーチャル日本語 役割語の謎」（岩波書店、二〇〇三年）では、大衆娯楽作品に濃厚に現れるステレオタイプな話し言葉（役割語の原理と起源を取り扱い、言語学者だけでなく評論家、小説家、アニメ作家、翻訳家らの注目をも集めた）。

むしろそうすることによって  
国語というような  
唯一純粹なものがあるかのようない幻を  
われわれが持つてしまっている。

かつては、古語イコール  
純粹な日本語っていう  
観念があつたんですが、  
今われわれが  
それを考えるときに、今私たちが  
思つてはいる標準語っていうのが  
唯一の純粹な日本語として  
存在しているわけですね。  
そしてそのような純粹な日本語が、  
太古から現在にいたるまで  
一貫して存在しているような  
幻想にとらわれる。  
私たちがそういう幻想から  
抜け出ることは  
極めてむずかしい、  
と改めて感じたんですね。

そこで吉村さんの仕事を見た  
ときに、そのマンガの語法文法と  
いうものがやはり国民国家と  
結びつきながら、成立したとたんに  
それ以前の状況を見えなくして  
しまうという研究成果を見たときに、  
やはりマンガの表現も  
言葉とシンクロしてるとなんだな。  
それはやはり近代における  
印刷メディアの問題でもありますね。

江戸時代の錦絵的な文法が、  
近代的なマンガの文法に  
変わっていくその具体的な  
過程を、視覚的な差異化の  
文法の成立とメディアによる  
普及という観点から  
吉村さんは追いかけて  
おられたと。

## 似顔絵とマンガ

そうですね。

まさに今おっしゃられたところで、僕が進めてきたのは、錦絵に代表される、いわば「江戸の図像」とマンガとがどう違うか。簡単に言いますと、錦絵はマンガっぽくないんですね。それはなぜか。



それを自分なりに

明らかにしたのが、

「似顔絵」の成立とまんが  
—顔を見ているのは誰か—<sup>(※1)</sup>

で書いた、顔に対する

注目度の違いなんですね。

写真が普及する以前以後において、人々が、会ったこともない人物をどのように見分けるか。

現在の僕たちは、顔で判断するのが普通だと、例えば実際に会つたことないですけど、

小泉総理の顔は毎日テレビで見るんですよ。そしたら小泉さんの似顔絵が

諷刺画に描かれるのは当然なんです。

でも、例えば織田信長が、その当時権勢をふるっていた、

信長のことを考えるときにですね、写真もない、

テレビもないっていうときに、信長という

名前は知つても、顔は会つたこともなければ

見たこともない。

金水さんは役割語度という表現を

されていますが、それに習って

「役割顔度」というのを設定すれば、

その度数がマンガでは

すごく高いということになります。



ところが、錦絵ではその度数が低い。  
その点が決定的に違つんです。

ですから顔が「その人が何者であるか」

という判断材料としての主役に座つて

から以降、おそらく図像において

マンガっぽさみたいなものが

獲得されるんだろうと思つたんですね。



そこで写真の普及過程を  
追いかながら、それが  
諷刺画表現をどう変えて  
いったのかを考察しました。

笑つたり怒つたり、  
いろんな感情を伝えるときに、

マンガはとにかく顔で

伝えようします。

すると、例えば  
伊藤博文の初期の似顔絵には、  
写真と同じような  
模写しているんです。



小林清親「から美麻空の願い」『団圏珍聞』1886年1月2日第525号(北根豊監修「團圓珍聞」16、本邦書籍、1982年、450～451頁)

ところが、時間が経つて慣れてくると、  
伊藤の顔の特徴であるほくろとか  
広い額とかが誇張されたり  
変形されたりするようになります。



山藤章二「カラー版 似顔絵」(岩波書店、2000年、93頁)

重要なのは、その特徴が  
誇張・変形されていく前段階の歴史を、  
似顔絵あるいはマンガの顔を見慣れた  
私たちが、知らないと、いうか  
忘れていることです。

先ほどおっしゃられた、標準語以前の  
風景が忘れられるというのと同じように、  
特徴だけを強調したマンガらしい

顔ばかりを見ている私たちには、  
顔がそのまま模写されていた

見えなくなつてしまつて  
いるんですね。



「日本漫画の父」と「マンガの神様」が  
そう考えていたということは  
単なる偶然ではなく実に示唆的で、  
その意味で僕はマンガの  
顔の在り方を重視しているんです。

当時の人なら、誰がどう見ても  
これは伊藤だとわかるよ。

「あ、伊藤はこういう顔なんだ」  
と読み手に伝わっていく。

漫画史の文脈では、  
「日本漫画の祖父」が

北沢楽天だとしたら、父は岡本一平も

なんですけど、その岡本一平も  
マンガの書き方で一番重要なのは

顔だ、と言うんです。

しかも、見たままの顔を描くんじゃなくて、  
できるだけその人の内面的な特徴を

つかまえなさいと。

そして、手塚も同じことを言うわけです。  
この岡本と手塚に通じる「顔が一番大事」

だっていう感覚には、錦絵のように  
顔が簡素に類型化されていた

歴史が欠落しています。



## 顔と個のアイデンティファイ

つまりイギリス人が描く日本人なんてのは、いわゆる「アジア人」ぐらいの括りだったんではないかと。

論文を読ませていただいて、日本の中における

マンガの形成や、

その中の岡本一平や

手塚治虫の役割つて

いうのは非常によくわかったた

んですけれども、日本マンガ

の形成というのは自律的、

自己形成的なものなのか、

あるいは西洋から

入ってきたものとの

関連はどうなん

でしょう。

そうですね、「日本人」像の描き方で

いくとチャールズ・ワーグマン（※2）とか  
ジョルジエ・ビゴー（※3）が描いた…。



社説「日本人の生活」(第2次) (明治3)  
ジョルジエ・ビゴー  
『日本人の生活』(第2次)  
1897年  
(清水勲「ビゴーが見た日本人」、講談社、2001年53頁)

たとえばイギリスの風刺画なんかには、目が細くて、顔は僕たちから見ると「中国人」のような格好をしている日本人が出てくるんです。草履なんだけど身に着けているのは中国や韓国にあるような物に見える。

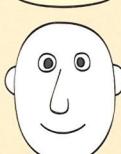
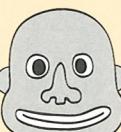
もう一つ興味深いのは、  
その顔に見合った身体の  
役割もできてくることです。  
これにも近代の人種・国民観が  
深く関わってきます。

*no my gay and festive Japonic youths  
you may wear spectacles like you are  
blue in the faces you never can look  
like Germans positively never.*



チャールズ・ワーグマン『ジャパン・パンチ』1882年5月号 (清水勲「ワーグマン日本素描集」、岩波書店、1987年、90頁)

つまり、白色人種だと黒人、黄色人種の人たちの特徴ですね。これは先行して紹介された情報、代表的なのは福沢諭吉の「掌中万国一覧」なんかでしようが、そこに、たとえば黒色人種とは、鼻が低くて、額がこう出て、唇が厚くて目がでつかいつていう説明が出てきます。それを絵にしていくと、ある種の類型化された顔ができるんですね。



また日清日露戦争を経過する中で海外情勢の情報も必要になってくると、当然ながら海外の国民や人種の人たちっていうのを、マン方に描かなければいけなくなる。そういう時代の要請もあつたわけですね。その中で黒人であるとか白人であるという特徴を持った身体を描いていくことが増えていき、その対比の中で少しづつ「日本人」の顔や身体の特徴も形成されていきます。

そういった人種や国民の描き分けとか、写真普及以後の情報を込めなければいけない顔の描き方とかが複雑に混ざり合いながら、戦前の諷刺画表現が江戸の図像とは違った文法でかなり鍛えられていくんですね。

※2 一八三三年～一八九一年。ロンドン生まれ。「イーストレイクアド・ロンドン・ニュース」の特派記者として一八六一年来日。翌年、時局諷刺雑誌「ジャパン・パンチ」を横浜で創刊する。以後、日本の景観・風俗や時事問題および当時の日本人の姿などのスケッチを多数執筆しており、幕末維新期の重要な國像資料として注目されている。

※3 一八六〇年～一九一七年。パリ生まれ。一八八二年来日後、陸軍士官学校教諭や語学教師を務める傍ら、「郵便報知新聞」「改新新聞」などに挿絵を執筆する。一八八七年に雑誌「トバワ」(第二次)を横浜で刊行、その他の雑誌や画集と合わせ、本の日常生活や文明開化に戸惑う政府や民衆の諷刺画を次々と発表する。日清戦争にも「ザ・グラフィック」特派記者として従軍、現地の写真・スケッチを残す。条約改正実施を目前に控えた一八九九年帰国。

※4 「団団珍聞」一八七七年五月「六日掲載の「内告字賣出品」のこと。福沢諭吉が姓「勝海舟」が金の鱗に掛け合わされた形で顔が描かれている。なお、「団団珍聞」は野村文夫（一八三六年～一八九一年）が創刊した、一八七五年から一九〇八年までの長期にわたる明治を代表する時局雑誌。本多錦吉郎（一八五〇年～一九二一年）は、小林清親（一八四七年～一九一五年）と並ぶ「団団珍聞」の看板画家で、西洋の技法から学んだ斬新な画風で知られる。ピコーを「団団珍聞」に引き合せた人物でもある。



そうですね。

あれはあれで、当時実際に見に行つた人たちにとつてのプロマイド写真のような役割になつていたでしようけど。

時代劇なんか見てますと

人相描きが貼られたりしますけども、描かれた顔と実物がアイデンティファイする。

同定するというような習慣が

はたしてあつたのかどうかと思つたわけで、

顔がひとつの個の表現であり、

また内面まで表現するという訓練が

近代以前になかつたということを考えると

なるほどな、と思い当たるわけで。

それを準備するのは

ひとつは写真ですよね。

僕はそういう考へていくと、

それは非常に伝統的なものの  
類型になつていたんでしょうけど。

僕は人相描きって本当にあつた  
のかなと。人相描きの実物つて

残つてゐるんでしょうかね？

そんな習慣がまつたく  
なかつたとは言いませんが、  
その仕方が全然違つた。

実物は僕も見たことないんですけど。  
ただ人相描きってのは  
モンタージュ写真と違つて、  
実物のものより、特徴を誇張したような  
ものの方が役立つんだみたいな話があります。  
あと「顔見知り」にとつては  
有効な地域限定のものだったのかもしれません。

先述の拙論では  
面白おかしく結論を  
書いてしまつたん  
ですが、

## 近代以前の人物の アイデンティファイ

「遠山の金さんのリアリティ」(※5)つていう、あれだけ顔をさらしながら「遊び人の金さん」と「御奉行の金さん」の顔が悪人たちに一致しないのは何でなのかな? あるいは「水戸黄門」にしても、あれだけ各地を旅してゐるんだから、こういう顔のいいさんや仲間が来たら気をつけろよ、という話になつてもおかしくないんですよ。でもそういう顔に関する情報はまわらない。この顔が個人情報として役立たないという設定は、けつこう時代劇に共通するんです。「暴れん坊将軍」も、「余の顔を見忘れたか」ですからね(笑)。





よく見ると髪はけつこう  
細密に描いてあるんですね。  
だからなおさら、浮世絵の顔は  
手を抜いてるとしか  
思えないんですよね。

極論を言つてしまえば、  
顔見て内面がわかるなんて  
こと 자체が近代的な考え方で、  
その考え方の上にしか

マンガは成り立たないだろうと。  
そうなると、現在のマンガの中では  
「無表情」の意味も変わつてくるんです。

そうかそうか。  
表情を中心とする顔の  
描写ということ自体が非常に  
近代的な問題で、最後内面まで  
表現するような媒体として  
確立されていくような過程を  
捕らえていかれて、  
そしてそれがなければ  
近代マンガが成立しないと  
いうこと  
なんですね。

はい。  
手塚治虫が内面を目玉に込めたと  
いうことを夏目さんは指摘していますけど、  
それはつまり、手塚が目玉とは内面を  
込められる表現だと考えているわけですね。  
ですから、目玉なんかの  
顔に内面を込めなかつた  
頃の絵、言い換えれば、  
「マンガっぽい」と僕らが  
感じないものを資料としたときに、  
逆照射として近代マンガの特徴が  
見えてくるんだと  
思うんです。

西原理恵子とかね。  
そういう意味で言うと、  
上手い下手は別にしても  
巧妙に仕組まれてますよね。  
文法として読み取ることが  
できる。絵が内面であるって  
確か、夏目房之介も  
書いてましたよね。



読み取れないことからくる笑いとか不安とか。  
あるんだと思うんですね。こちらが表情を  
不条理マンガなんか、例えば吉田戦車の  
ギャグのギャグたるゆえんというのは、  
あの無表情というか感情を抑えた表情の中にも  
あるんだと思うんですね。こちらが表情を  
西原理恵子と/or  
吉田戦車「伝染るんです。」(小学館、一九九一年、五〇頁)  
西原理恵子「ほんち」(スピリッツ)一九九八年、三八頁)



## マンガの身体表現

国版右：秋本治「こちら亀有公園前派出所」九巻（集英社、一九八一年、九九頁）  
国版左：松本零士「銀河鉄道999」総集編（ピック・ゴールド）特別編集刊行、小学館、一九九七年、九〇頁



さきほどお話をした顔と身体の組み合わせに戻りますが、いつも典型例であげるのがこの2つで、「銀河鉄道999」のマーテルと鉄郎、それと「こちら亀有公園前派出所」の両さんと中川なんですが、よく考へると、この顔と身体と二人の性格っていうのは入れ替わらないんです。

つまり、聰明でちょっとミステリアスな魅力を持つたマーテルは

いても、聰明でミステリアスな鉄郎はいないし、素直で純粋だけど

ドジな鉄郎はいるけど、

素直でドジなマーテルはない。

一方の両さんと中川の関係も、基本的にこれに似ています。

江戸っ子氣質を

持った

中川には

ならない。

しかも、鉄郎や両さんは、どちらも背が低くて股で足が短い。これって、先ほど見た諷刺

画に描かれる典型的な「日本人」の身体ですね。対して、マーテルと中川は八頭身で金髪の

美男美女、いわゆる「白人」的身体なんです。

しかも、鉄郎や両さんは、どちらも背が低くて股で足が短い。これって、先ほど見た諷刺画に描かれる典型的な「日本人」の身体ですね。対して、マーテルと中川は八頭身で金髪の美男美女、いわゆる「白人」的身体なんです。

しかも、鉄郎や両さんは、どちらも背が低くて股で足が短い。これって、先ほど見た諷刺画に描かれる典型的な「日本人」の身体ですね。対して、マーテルと中川は八頭身で金髪の美男美女、いわゆる「白人」の身体なんです。

「こちら亀有公園前派出所」

の両さんと中川なんですが、よく考へると、この顔と身体と二人の性格っていうのは入れ替わらないんです。



### 今後の研究について

今回、役割語について学ぶことが多かったのですが、僕のマンガの研究と共通するのは、

刷り込み的な習慣という点ですね。

日本にいれば、マンガは6歳

くらいになるとみんな読める

んですね。

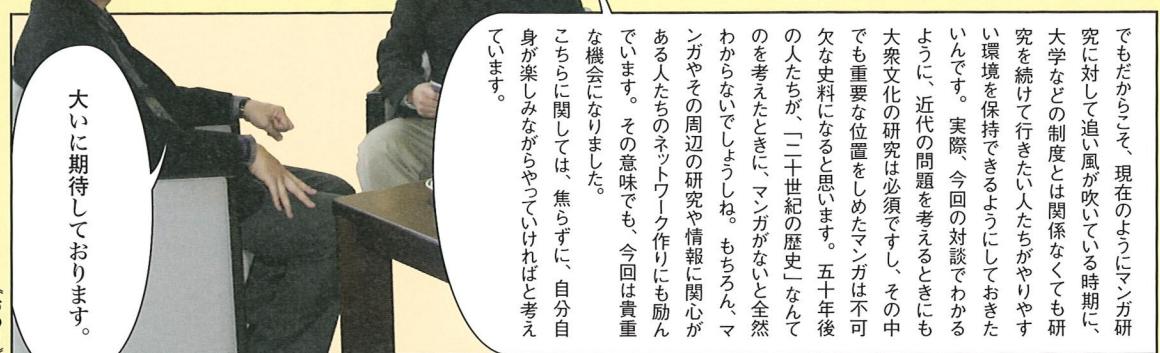
んで

実際、「コロコロコミック」(※6)なんてこんな分厚い雑誌を、小学生低学年で早い子なら一日で読んでもう。

しかも、マンガの最低限の文法をそこで習得すれば、読めない漢字や意味のわからない概念なんかを除けば、大人ものだろうが青年ものだろうが、世の中の

マンガを読みます。つまり、ある種の大人しか立ち入れないような世界観が描いてあっても、日本にいる子供たちは、それを読み取る文法を小学校に入る時分にして身体化してしまっているわけです。

そういった人種観みたいなものが、現在では日本人自身によつて再生産されていると僕は見なしているんです。で、少女マンガも同じ構造の、別の表現ではないかと。



# 約

四キロメートルほど離れた海の村と山の村の間で一片の土地をめぐつて争いが続いた。問題の土地は山の村の近くにある。その土地の所有を主張する海岸の村のある一族が、山にのぼつてきて、土地のまわりに柵をつくった。山

の村の人々は家の中から海岸の村の傍若無人さを眺めている。出ていけば、山刀を使つた争いになつてしまふだろう。彼らはそれを恐れているのだ。海岸の人々が去つたあと、山の人々は、一人二人と家からでてくる。しばらくすると、その柵を彼らはこわし始める。そんな小競合が数年続いていたのだ。

ある時、とうとう血を流す争いがおきた。海岸の村の一族が、隣近所の人間をあつめて（これをソンガという）、山の村に攻めてきたのだ。彼らは山刀、弓矢、槍で武装し、山に登ってきた。彼らは、山の村のいくつかの家をこわし、火をつけた。山の村の人間も山刀で応戦した。二人が死に、何人かの人間が大けがをした。海岸の村人も、逃げるときに矢で大けがをしたものが何人かいた。

翌日のことである。きのう弓矢をもつてやつてきた海岸の村の男が一人で山の村にのぼつてきたのだ。彼は武器はもっていない。もつてているのは、魚をいれた籠だけである。山の村の人に魚を売りながら、彼は言う——「きのうはソンガだつたんだ。ソンガされれば、しようがないだろ。きょうは魚を売りに来たんだ」と。

それなりの売り上げを手にいれた彼は満足そうに海岸に帰つていった。

\*\*\*\*\*

インドネシアのフローレスという島のエンデの村での出来事だ。

エンデの社会には人々を分類するさまざまなるルールがある。私の母親の実家は私にとつて「嫁を与える者」であり、彼らを私は常に敬わなければならない。彼らにとつて私は「嫁を受け取る者」であり、劣位のものとして扱われる。姻族をめぐるこのルールに付け加え、兄弟姉妹をめぐるルール、あるいは親子をめぐるルール、等々によつてエンデの親族の複雑なゲームはつくられる。人と人との間には、かならずなんらかの親族のヒエラルキーがあるのがエンデの社会である。

数学の体系のように、エンデのルールはたいへんに複雑であり、同時にまた美しく整然としている。厳格なルールは息が詰まる。エンデには、ルールの外側が用意される。優位に立つ嫁を与える者であつても、たまたま同じ村に住んでいるならば、場合によつては同等の「ご近所」として考えられるのだ。「ご近所」はルールの束のすき間である。「ご近所」間の関係は、ルールの外側の平等な空間に成立している。ソンガもまた、人々をルールの外に連れ出す装置である。

エンデの社会の理解をさらに難しくしているのは、ルールの内側と外側という考え方だけではない。世界がしばしばルールに反して構成されるこ

とがあるのだ。たとえば、あたらしい婚姻によつていままで嫁を与える者であった人々が嫁を受け取る者になることがある。一方で厳格で複雑なルールを持ちながら、他方じつさいの世界は混沌としているのである。

日常生活の中で、ルール、ルールの外側の存在、そして混沌とした世界の間の複雑な関係を交通整理をするのが、「喋る」こと、宣言することである。舞台に登場するとき、エンデの人はしばしば「私はかくかくの者としてやつて来たのだ」と宣言する。人が死んだとき、死者の母の兄弟は葬式においてもつとも大事な賓客となる。ある葬式で、死者の母の兄弟がやつてきた。彼は言った――「いまは『ご近所』として手伝いに来たのだ。かまわなくてよい」（彼は死者の村の住人だつた）「今度来るときは『母の兄弟』としてくるから、そのように扱え」と。結婚式に参列し、そして帰宅し、その後（しばしば服装を変えて）また同じ結婚式に参列する人々がいる。彼女らは、最初は、たとえば、嫁を与える者として出席し、二度目は嫁を受け取る者として出席しているのだ。その都度、彼女らはおのれの資格を名乗るのである。

人だけではない。モノもしばしば宣言の対象となる。犬は嫁を受け取る者が嫁を与える者に与える財貨であり、豚は嫁を与える者が嫁を受け取る者に与える財貨である。モノもまたルールの網の目にからみとられているのである。嫁を与える者が訪れてきた時に、しかしながら、豚肉しか手元にないことだつてある。ホストである嫁を受け

取る者は、豚肉の料理を恐る恐るゲストの前に出す。そして言う——「犬の肉です」と。ゲストもまた、「犬の肉だな」と言いながら、おもむろに豚肉を食べるのである。

このように説明していけば、いささかわれわれの理解を絶するような冒頭のエピソードも腑に落ちるようになるだろう。「きのうの私ときょうの私は違うのだ」と彼は主張し、みなその主張を受け入れるのである。

\* \* \* \*

現代の日本人は複雑な社会の中で一日中役割という仮面をかぶつて生活している。仮面をとつて素顔になれる唯一の場が家庭である。そのようにテレビのしたり顔の解説者が語る。しばしば「未開社会」が比較に出され、毎日を素顔で生活する人々として紹介される。そんなことはない。エンデの人々は、たしかに市場社会の周辺にあるのだが、仮面の数と仮面の使いわけに関しては、「現代の日本人」の比ではないのである。そしてそれらの仮面を使い回す場面こそが家族（親族）という場である。もちろん、日本人が家庭で見せる素顔、エンデの人が親族のゲームの外側で見せる素顔とともに、「素顔」というもう一つの仮面であることは忘れてはならない。

中川敏（なかがわ・まさとし）

一九五三年生まれ。最終学歴はオーストラリア国立大学（Australian National University）アジア太平洋研究所（Research School of Pacific Studies）P.D.（人類学）取得。京都大学（東南アジア研究所）助手、大阪国際大学（経営情報学部）教授を経て、現在大阪教育大学院人間科学研究科教授。主な業績として、「交換の民族誌」（世界思想社）、「異文化の語り方」（世界思想社）、「モルディブの言語」（金子書房）など。

## 金

水敏さんの『ヴァーチャル日本語』役割語の謎（岩波書店）には、明治から昭和にかけてはやつた「女学生ことば」の役割が興味深く説かれている。「よくつてよ」とか、「知らないわ」という類のことばである。本当は地域や個性（だと思う）によって異なる言葉つきをしているはずの全国の少女や元少女たちが、「女学生ことば」を身にまとつて、「仮想のコミュニティ」、川村邦光さんのいう「オトメの世界」を形成していたのだという。

私はこの箇所を読んで、とくに心を惹かれた。心を惹かれたというわけは、別にオトメの心情を共有するからというのではない。共有しなくもない、と呟きたいが、それはどうでも「よくつてよ」。私は山口県の生まれであるが、京都の大学に入ると同時に故郷の方言は口になくなつた。かといって、関西弁に染まつたわけでもない。なぜか標準語でしゃべるようになつたのである。標準語で議論し、標準語で日常会話をするようになつた。帰省しても同じ。家族は戸惑っていた。おまえのは東京弁でもねえぞと、東京出身の友人には指摘された。地域性のない、いわば宙に浮いた言葉が、当時私の入り込んでいこうとしていた哲学の世界にふさわしかつたのかと、今にして思う。この癖はたぶん一生ものなのだろう。

さて、オトメからほどんどん離れていくが、

本当に代表される役割語を、金水さんが「仮面（ペルソナ）」と規定していたからである。ペルソナは、英語でいうパーソンである。生命倫理学という分野で、パーソン論というものが幅を利かせているのを存じだらうか。どこまでを人格を持つ存在として扱つていいのか。胎児はパーソンなのか、脳死の人はどうか。こういう議論である。パーソンでなければ、その体から臓器をいただいてもいいのではないか。命倫理をやる人は、そういうあられもない議論がわりかし好きである。その命倫理の先頭に立つ一人に、オーストラリアのP.シンガーがいる。彼があるときふと、パーソンの語源にさかのぼつてみたことがある。パーソンは先述のとおり、ペルソナというラテン語から来ているのだが、より詳しくその歴史をかえりみると、「役割」とか、「諸関係の主体」という意味を持つのである。シンガーは、動物だって「諸関係の主体」になりうる、少なくともチンパンジーなどの大型類人猿は自己意識や時間の観念をもちうる点で、人間の乳児などよりははるかにパーソンらしいと論じる。彼はパーソン概念を拡張して、人間以外のものにも及ぼそうとしているのである。これは「動物の権利」という、私たちが胸に手を当てて考えるべき問題に通じ

## 告白する仮面

中岡 成文

私が心を惹かれた別のわけは、女学生ことばに代表される役割語を、金水さんが「仮面（ペルソナ）」と規定していたからである。ペルソナは、英語でいうパーソンである。生命倫理学という分野で、パーソン論というものが幅を利かせているのを存じだらうか。どこまでを人格を持つ存在として扱つていいのか。胎児はパーソンなのか、脳死の人はどうか。命倫理をやる人は、そういうあられもない議論がわりかし好きである。その命倫理の先頭に立つ一人に、オーストラリアのP.シンガーがいる。彼があるときふと、パーソンの語源にさかのぼつてみたことがある。パーソンは先述のとおり、ペルソナというラテン語から来ているのだが、より詳しくその歴史をかえりみると、「役割」とか、「諸関係の主体」という意味を持つのである。シンガーは、動物だって「諸関係の主体」になりうる、少なくともチンパンジーなどの大型類人猿は自己意識や時間の観念をもちうる点で、人間の乳児などよりははるかにパーソンらしいと論じる。彼はパーソン概念を拡張して、人間以外のものにも及ぼそうとしているのである。これは「動物の権利」という、私たちが胸に手を当てて考えるべき問題に通じ

るが、今そこに入り込むのはやめておこう。

私が言いたいのは、パーソンを仮面と言い換えただけでは収まらないものがあるということである。仮面をかぶつていつとき役割を演じても、仮面を脱いでしまえば下から素顔が出てくるというのでは、あまり面白くない。仮面はその人なのである。その時々の役割の中に入り込み、関係をマネージすることで、その人となるのであるう。

臨床哲学というものを始めてから、このこ

とが体でわかつたような気がする。いろいろ

な職種、立場の人たちと付き合う。現場性

といふことをよく考える。何が私にとつての

現場か。たまたま自分がおかれた場、ではな

いはず。どんな場に遭遇しても、私はそこで

何らかの役割を果たせるはず。問題はそれ

を（大げさに言えば）召命、使命と感じられ

るかどうかであろう。ともかく、様々な人が

右往左往する交差点に、自分がなったように

感じることがある。交通がうまく秩序立て

ばいいのだが。臨床哲学でやっている対話モ

デルではファシリテーター（司会者、進行役）

の役割がとても重要である。自分の意見を

言うという意味では介入しないで、しかし対

話の流れを促進（ファシリテート）するべく密

かに介入する。いくらか経験を積んでも、そ

の呼吸はまだむずかしい。

地位が人を作ると言われる。役割にはま

り込むようには人は努める。うまく行きすぎることもある。過剰順応というやつである。

いやそれにしても、COEを含めて昨今の大學生は忙しい。役割を演じるのもつくうことになることがある。私などはそれでもしょっちゅう休憩しているほうなのだから、愚痴るのもばかられるが、それでも「この仮面を脱いでみたら」という誘惑に駆られる。駆られるが…と言いまして筆をおくのが賢明であろう。

中岡成文（なかおかなりふみ）  
一九五〇年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程退学（哲学）。  
福岡女子大学専任教員を経て、現在大阪大学大学院文学研究科教授  
（臨床哲学）。主著に『臨床的理性批判』（岩波書店）、「ハーバーマス—  
マニケーション行為」（講談社など）。